16　知と財で勤王の志士を支えた文人

山中信天翁（しんてんおう）

（1822～1885／日進）

1　勉学に励んだ少年時代

山中信天翁は、文政５年（1822）、今の碧南市東浦町に山中子敏の二男として生まれた。（長男は夭折。号は信天翁・静逸、字は子文、諱は猷・まつる）

家は沼津藩主の御用達を務める大地主であった。少年の頃、大坂に出て経書や歴史を学んだ。帰郷後も自らに厳しい日課を課し、日々勉学に励んだ。

2　近代国家樹立をめざして

安政元年（1854）、同じく大坂で緒方洪庵の適塾に学んでいた弟猷（ゆう）が急に亡くなった。憂国の思いが強かった弟の遺志を継ごうと家をもう一人の弟に譲り、伊勢に学んだ後、京都に行った。

そこで勤王の志士や公卿とも交わり、国を憂い、国政を論じた。封建制度を廃止し、天皇を中心とする四民平等の近代国家樹立が、日本の行く道であるとの思いを一段と強めた。

3　知と財をもって

「安政の大獄」（1858）に始まり、「桜田門外の変」（1860）や、「八月十八日の変」（1863）で、尊皇攘夷派が京都から追放されるなど政局の混迷は続いた。

「池田屋騒動」（1864）に見るように、勤王の志士の多くは、佐幕派によって暗殺された。

一方信天翁は、京都郊外の修学院村に移り住み、時運の来るのを待った。都から一歩退くことで、大局が眺められ、冷静な目と判断力を持つことができたのである。血気にはやる武士とは一線を画し、文人としての知と、素封家としての財をもって勤王の志士を支えた。

その信天翁の陰の動きが、洛北に閉居謹慎中の岩倉具視の知るところとなったのである。

4　岩倉具視の懐刀として

慶応３年（1867）１月、明治天皇が即位した。朝廷の空気は一変し、尊攘派の公卿の赦免が行われた。以後天皇が若年であったため、側近の岩倉具視が維新改革の主役となった。その岩倉具視の懐刀として信天翁は、維新政令の草案の多くを作成した。

「鳥羽伏見の戦」（1868）では、食糧や軍事費の調達の任につき、功労をあげた。その年、初代会計官・駅逓司（えきていし）知事（後の郵政大臣の職）に任ぜられた。また、明治天皇の東京遷都の行幸では、御用掛を仰せつけられた。産業や労働に精を出す人を顕彰したり、災害で難儀をしている人を救済することなど、国民を思いやる政策を建言した。

その年従五位に叙せられ、翌年には桃生（ものう）県知事に就いた。

5　謙譲の三河人気質

桃生県はまもなく隣接県に合併され、その（今の宮城県）知事に任ぜられた。そのため前任者が退職を余儀なくされ、心を痛めた信天翁は、すぐに辞任を申し出た。しかし、一旦お預けとなった。

明治3年（1870）の岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、大隈重信、伊藤博文、山中信天翁などが集まった御前会議の席で、信天翁は再度辞表を提出した。そこで信天翁の願いは、ようやく聞き入れ許された。このことは、信天翁の廉潔な人格と謙譲を美徳とする三河人気質をよく表していると言える。

6　京都に隠棲

その後信天翁は、伏見宮と閑院宮、北白川宮の家令職を兼務することになった。しかし、それも4年で辞し、明治6年（1873）9月、同志として闘った勤王の志士たちが中央の政界で活躍する中、51歳ですべての官職から退き、京都に隠棲した。

7　政治家としての文人

京都下鴨の糺（ただす）の森に居を構え、風雅な生活を送った。近代日本画壇の巨匠富岡鉄斎は、信天翁を兄と慕い、教えを乞うたという。山紫水明を描いた水墨画や書は、豪放な中にみなぎる熱情がほとばしっている。

信天翁は純粋な芸術家というよりは、儒学に基づく政治家としての一面をもった文人であった。

宗教心が厚く、倹約に努め、正直で高潔な人格であった。このように詩歌や茶華道にも通じたが、ただ風流の道を究めるだけではなく、時々は岩倉に国政に関する上申をした。

8　嵯峨に対嵐山房を築く

明治10年（1877）には嵯峨に「対嵐山房」を築いた。その年行幸の折、信天翁はその山房において明治天皇の尊顔を拝するという栄に浴し、天皇より金品を拝受した。また、自分の没後この山房が世人に渡り、聖蹟を汚されることを恐れ、宮内省に献納を申し出ようと上京した。

しかし、その途中病に倒れ、願意を果たすことなく明治18年（1885）、64歳の生涯を閉じた。貞照院（現 碧南市霞浦町）に墓碑が建てられ、正五位を受けた。大正2年（1913）には、従四位を授けられた。

信天翁は国を思い偉業を成し遂げた。しかし、私欲を捨て、自ら歴史の表舞台を去った。この陰徳を重んずる姿こそ三河人らしいのである。

◆もっと知りたいなら

・『信天翁』（大正4信天會）
・『山中信天翁没後百年記念目録』（昭60碧南市教育委員会）
・『山中信天翁遺墨集』（昭56碧南市教育委員会）
・『山中信天翁』（平21季刊誌『みどり』浅井久夫）